

トレンチコート

柏崎

睦 岩手

近所よりとどく西瓜のおすそわけ我にうれしき四分ぶんの一個
震災の年に生まれし孫ふたり十三歳となるをことほぐ
片付かぬこころのありて一人すむ家の終活はかどりがたし
やうやくいま心定めて廃棄する夫気に入りのトレンチコート
へまをして自らへいふ「おばかさん」叱りてくるる人のなき今

真夏の魔物

薄葉

茂 宮城

台風の近づく朝はどことなく鳥の不穏な鳴きごゑがする
東北の太平洋側なめてゆく台風それは真夏の魔物
甲子園は別世界なり台風の渦からとほく熱戦つづく
選歌する妻を横目にわれもする仕事のひとつスポーツ観戦
丸刈りを好みて選ぶ現代の球児は派手に喜んで泣く

こつちだよ

島本 ちひろ* 埼玉

雨あがりコンクリートの細道に赤青えんぴつひとつひとつ転がる
ぬいぐるみふたつ予約す子や猫のためではなくて自分のために
こつちだよこつちだよって花落とす百日さるすべり紅たら寂しんぼうね
数か月分のかなしみ語りたりカシスアイスはゆっくり溶ける
宣材のうちわをもらう空調のよく効いているイオン一階

かき氷

伊 沢

玲 千葉

手回して天然氷を削るみせ雲のやうなる氷をつくる
氷塊の回るむかうに二人子とあそびし夏がきらりきらりす
子離れの途中ぐづぐづ崩しゆく氷いちごは溶けても甘し
かき氷たべ終へるころ身の芯のしらはね冷えて罅入るごとし
親離れしてくれて子よありがたう積乱雲の縁がかがやく

秋の音

斎 藤 美 衣 神奈川

ガスの火をぼぼと灯しゆきひらも夜^よのたましひもとろ火にかける
病むひとの時間がにほふ部屋のそと沸き立つやうにひぐらし鳴けり
白舟^{しらふね}のやうにしづけし子のからだに夏掛けふはりとかさねたるゆふ
夜はもう秋の音して二十五年暮らしたひととならんであるく
ゆつくりと道をくだりて早朝の街の微動にこころを混ぜる

くつの先にて

原 良 夫* 神奈川

祈るしかないことありて雨降りの午後はスマホと閑居しにけり
松ぼっくりみたいに乾いたせみのこと路肩に寄せるくつの先にて
かささぎの渡せる橋があるならば行って謝りたいことがある
花おわり放置されたるしゃくやくの園にいね科の草のなびけり
ごぼうなどいろいろはいつたさつま揚げを肴にただただ酒を呑むなり

紫陽花の群

沢 麗子 富山

立つたまま枯れてしまひし紫陽花の群はあるいはふる里の町
命日の父のひと日を賑々し五歳の孫のなぞなぞ本は
しじみ貝花咲くやうに開かざるひとつがありぬ鍋の湯の中
ブラウスの第一ボタン留め直し「禁帯出」の本を見にゆく
八月のプールの水は青すぎてゴールに着かないわれの背泳ぎ

けふも生きるか

鷺 巢 錦 司 静岡

日の丸に寄書きをしてバリへ立つアスリートたち 戦争を知らず
原発の安全神話をためすがに民に代りて地の神ふるふ
あぢさゐのはな圧し合ひて咲きゐたり雨に暮れゆく水惑星に
みどり子の明るき声を聞くごとし早苗そよげる街中の小田
朝なさな新しき水あふれ出でかほを洗へば けふも生きるか

竜宮の乙姫の元結の切外し 康

哲 虎* 兵庫

亀に乗る男に見せてはいけません竜宮の乙姫の元結の切外しは
亀に乗る男がくれと泣きついた竜宮の乙姫の元結の切外し
太郎さん今からですよ竜宮の乙姫依存症の治療は

太郎さんまず捨てましょう竜宮の乙姫の元結の切外しを
コスモス誌の新人紹介欄にのる浦島太郎(紹介者 康)

デイケア初日

則武博子 兵庫

新しきスニーカー履き門口に送迎車待つデイケア初日
音はづす声もまじりてデイケアに誤嚥予防の斉唱ひびく
デイケアの今日の脳トレ難読で鑢と錐にあたま寄せあふ
身を離るるもののさびしさ梳るしら髪ほそく床に散りばふ
積もるほど埃あらずと家掃除の回数へらす老いのひとり居

口訳古事記

鮎川 清 山口

町田康の『口訳古事記』読み耽る五〇〇ページに三日をかけて
露骨なる関西弁の飛び交ひて太古の神は浪速のオッチャン
東西のハチャメチャ作家の双壁かチャールズ・ブコウスキーと町田康とは
町田康の処女歌集なる『くるぶし』を缶ドロップスを舐むるごと読む
町田康の本を読みつつ眠り込みそのまま目覚めざるこそ至福

ぼあーんと眠い

梶原 道幸 熊本

水溜り瘦せつつひかる山みちの泥どろをもち去る五月の燕
若葉光る五月の街を訪ねゆく楢林春代さん君の葬儀に
とり壊す橋本薬店百年の埃たてつつ男はたらく
入り混じり背戸に啼きつぐ諸蟬の声の中にてぼあーんと眠い
春兆す雪と思へど雨混じり槍のごときが真つ直ぐに降る